

牛久市文化財保護審議委員 栗原 功

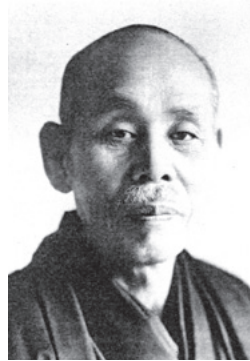
川村理助(現・岡見町出身)と吉田弥平(現・上柏田町出身)②

— 明治・大正時代に東京高等師範学校の教授として奉職 —

川村理助(後編)

捨我精進

— 川村が体得大悟した人生の基本理念 —



川村理助
慶応3年(1867年)～昭和22年(1947年)
写真は晩年の川村理助

川村理助が、わずか1年余にして東京高等師範学校教授を辞職したのは、当時の校長伊沢修二と教育に関する意見が合わなかったためであった。伊沢修二は、洋楽に基礎をおき、和洋音楽の融合もある程度考慮に入れた唱歌教授の力リキユラムを創案するなど、わが国の音楽教育の基礎を築いた。川村は、明治32年(1889年)4月に東京高等師範学校の教授を辞職すると、同年7月に東京機械製造(株)の取締役に就任した。茨城師範学校の生徒当時の校長松木直巳が同社の社長で、松木に請われたのであったが、就任3カ月余で松木は急逝し、同社再建

に4年の年月を費やした。

明治37年(1904年)7月に、大日本図書(株)に移り、取締役に就任して中等(旧制中学)教科書の発刊事業に専念した。大正5年(1916年)には培風館を設立して出版社経営に乗り出したが、利益の大半を教育基金に回すという『理想』に走り過ぎて失敗した。

ところで、川村が体得大悟(迷いを去り、完全に悟ること)とした『捨我精進』とは、事業の失敗や長男と妻の死去が、35年の間にあり、これらによる血の滲むような人生体験の中からつかみとった人間愛の極致であった。

その基本理念の概要は、

『一切のなやみは自分自身のことを考えすぎることからおこる。我見・我欲・我情を捨てて当面の目標にむかつて精進する。捨我精進こそ人生の基本である』
というものであった。
川村は、精進会を結成し、会長となり機関誌・月刊精進を創刊して捨我精進の伝道に努めた。精進会の本部は調布高等女学校の校長室におかれた。さらに川村は、大正12年(1923年)7月より、捨我精進の全国伝道の旅に出た。川村の足跡は、日本本土はもとより、遠く樺太(北緯50度以南が日本国領)、満州(関東州(旅順・大連など)は日本の租

借地)に及び、かれの講演会への参加者は20万人に達した。もう一方で川村は、ラジオの人生相談の番組を担当して『悩み迷う人々』の救済にもあたった。
川村理助先生と私(近藤宏二)
昭和56年(1981年)の夏、川村を一生の師と仰ぎ、文化放送(QR)などでラジオクニックとして活動中の医学博士・近藤宏二より直接話を聞く機会を得た。
『偉大な教育者であった川村理助先生に縁あって私は東大医学部に入る前の肋膜炎療養時代(昭和5年(1930年))出逢った。急性肋膜炎の発病で病床にふせついていたとき、月刊雑誌で川村先生の人生相談を拝読したのが縁で、調布高等女学校において開催された精進会の講演会に出席するようになった。：戦後、私の一生の師、川村先生も御永眠された。しかし、私が青春時代にきざみこまれた人生の指針、つまり、『捨我精進』の道は、今日もかわることなく、医療奉仕・社会奉仕という生活態度となっ

て生きているようにおもう…』
この話は、昭和56年夏に早朝の文化放送のラジオクニックで、1回(15分)放送された。もう一方近藤宏二より広報うしく昭和56年2月1日号へ『川村理助先生と私』という寄稿文もいたっていた。

近藤 宏二

明治43年(1910年)～平成2年(1990年)。群馬県出身。東京帝国大学医学部卒。医学博士。昭和27年(1952年)からNHK、文化放送などのラジオ・テレビドクター。NHKラジオ『療養の時間』以来、放送は1万回を超えた。傍ら、昭和30年代初めに人間ドックと健康管理のクリニックを開設して、地域住民の健康指導も行ってた。



広報うしく6月1日号当コーナーにおいて、表記に誤りがありました。お詫びして訂正します。

誤 ~~捨我精神、捨我精神~~
正 捨我精進